

〔研究ノート〕

聖山「アトス記」拾遺

——ドストエフスキー或いは川又一英——

国 松 夏 紀

始めなければ終わらないと肝に銘じて、ちょうど川又一英氏の遺著『エチオピアのキリスト教 思索の旅』を読み了えたのを良い機会として、ともかくも書き起こすことにしよう。

そもそもの話の発端は、もう残り少ない本年（2013年）から17年前の海外研修に遡る。モスクワ、ペテルブルク各2カ月滞在、その前後を旅行に当たった。往路はシベリア鉄道始発ウラジオストク・終着モスクワの間、ハバロフスク、イルクーツク、オムスク、エカテリンブルクに途中下車・各都市2泊ペースで乗り継ぎ、乗り継ぎを重ね全線踏破。それに対して復路は、モスクワから南下、ウクライナのキエフ、イスタンブール経由アテネへ。アテネからテッサロニキ経由で最終目的地、東方正教の聖地アトスに3泊4日。アテネに戻り、モスクワ経由で関空に帰着したのであった。

思い返せば我ながら40歳代最後の年とは言え、エネルギーがあったと思う。とりわけ、その14年後、2010年秋から翌年秋まで1年間の研修、60歳代半ばの時と比べるとその違いは歴然たるものがある。ソウル経由モスクワへ直行、そこで6ヵ月、ロシアの本格的な冬季を初めて体験し、ペテルブルクで同じく6ヵ月、春から白夜、夏から初秋を経て、ヘルシンキ経由関空へ直行帰着。これで一杯一杯余裕無しといった塩梅であった。

閑話休題。1996年ただ一度の印象的な「聖山アトス体験」を巡って何度か

キーワード：聖山アトス、ドストエフスキー、川又一英

の口頭報告の機会を得た後に下記の一文を草した。

「アトス記—ドストエフスキー—或いは三島由紀夫—」『国際文化論集』
第22号 2000年12月 桃山学院大学総合研究所 pp.159-170

豊かな自然環境（それは、今遙か遠くから時空を隔てて落ち着いて思い返せば、キリスト教の修道修行に相応しい厳しいものとも思えるが）の下に点在する修道院・庵室、眩いばかりに限りなく青い天と地、静寂の夜空には文字通り降るが如き満天の星……

そういった印象に圧倒されながら、ドストエフスキーの『悪霊』のスタヴローギンが所謂「告白」文書で述べる人類の《黄金時代の夢》について、三島由紀夫のギリシア憧憬、そしてまた作家ドストエフスキー自身のアトス憧憬、さらにロシア中世のイコン画家アンドレイ・ルブリョーフの「青」を巡って、聖山アトスでの想念を思い返しつつノートしたものであった。

ここで実は、ドストエフスキー研究者としてはあるまじき失策を犯していたのである。それは、スタヴローギンの所謂「告白」文書における人類の《黄金時代の夢》その多島海（エーゲ海）のイメージについて言及しておきながら、もう一つ重要なヨーロッパ遍歴、その巡歴における聖山アトス訪問と終夜禱参列。アトスにおけるスタヴローギン、このことがスッポリ抜け落ちていたのであった。小生もまたロシア系のパンテレイモン修道院に宿泊を乞い、中庭に位置する壮麗な教会内陣で、未明から夜明けまでの祈りに列しつつ、その傍らにスタヴローギンをも想起すべきでもあったところ、どういう加減かも覚えず失念していたのであった。ドストエフスキーの作品研究の中でもとりわけ、完成作『悪霊』からは割愛・除外された1章、通称「スタヴローギンの告白」の章（正しくは「チーホンのもとで」の章）を専門として研究している立場からは、誠に遺憾としか言いようがない。

一読者としては尚更のこと、限りなく青い天地の境に、スタヴローギンと共に身を浸すべきでもあったのだろう。そのありうべき事態への遅ればせなが

らの復旧作業がこの一文の第一の意図であり、それとともに「アトス巡礼」の良き先達であり、且つ同窓の先輩でもある故川又一英氏をささやかながら偲びたい。さらには、最近のロシアのアトス関係書籍情報を若干提示する。

見落としとか失念は誰にでも何事につけてあることだろうが、何かに集中している時ほどかえって起こりがちなような気がする。「アトス」に関しても集中がかえって視野を狭めてしまったようだと思っている訳だが、「本題」に入る前に幾つか(!?)の失策について触れておきたい。

まずは、「世界遺産」の問題がある。「アトス」は1988年に世界遺産、しかも文化遺産と自然遺産の複合遺産に認定されているのであった。1988年と言えば、ロシアのキリスト教化1000年記念の年であり、モスクワ、当時のレニングラードから国際比較文学会（ICLA）が開催されたミュンヘンを初め西欧諸国を巡歴した年ではあったが、世界遺産そのものについて認識も深くなかった。また、「アトス記」を執筆した2000年に至っても、「ミレニアム」の認識はかなり強かったものの（「ミレニアムに『聖書』通読を！」などと言われたりした）、世界遺産アトスには思い至らなかつたのである。法隆寺、姫路城、屋久島などが認定されたのが1993年であるから、世界遺産に対する関心は高まっていたと思われるが、それとアトスとを結びつけて考えることはしなかつた。そういう次第であるから、ここであらためて「世界遺産」としてのアトスに関して、ノートしておきたい。出典は、＜小学館GREEN MOOK＞21世紀世界遺産の旅（2007年12月刊）である。

「海と山に隔てられたギリシア正教最大の聖地アトス」は文化遺産と自然遺産の複合遺産であり、

登録名称：Mount Athos

所在地：ギリシア北部中マケドニア地方アトス山自治区、ハルキディキ半島の東端、テッサロニキの南東約120km.

アクセス：テッサロニキから入山口となるウラノポリスまでバスで約2時

間30分。一般旅行者には船上からアトス山を眺める周遊コースがある。

趣旨説明：ハルキディキ半島の最先端にある、標高2033mの「聖なる山」がアトス山である。7世紀頃から修道士がここに住みはじめ、10世紀には修道士アタナシウスがメギステイス・ラヴラ修道院を創設して以来、次々と修道院が築かれた。鬱蒼とした森に覆われ、海路でしか近づけないアトス山には、今も20の修道院(ギリシア正教の修道院が17、ロシア、ブルガリア、セルビア系の修道院が一つずつ)と多くのスキティ(別院)があり、約2000人の修道士が禁欲的な生活を送っている。

現在も女人禁制で、男性でも一般人は、テッサロニキのアトス山巡礼者事務所に許可証を申請しなければ入山できない。

実際に訪問した1996年から数えて17年、文章を書いた2000年から13年、状況は特に変わりなく見える(もっとも、長年アトスに親しんだ故川又一英氏の記述によれば、道路整備・クルマの導入等かなりドラスティックな変化の予感が窺えもするのだが)。そこで、複合遺産認定当初、アトスはいかなる基準をクリアしていたのかを見ておこう。

文化遺産(記念物、建造物群、遺跡、文化的景観)の登録基準は①～⑥項目、自然遺産の登録基準は⑦～⑩項目あり、複合遺産は両方の遺産の基準の一部を満たさなければならない。アトスはこの内、①②④⑤⑥⑦を満たしている。それぞれの基準の内容は以下の通り。

- ① 人間の創造的才能を示す傑作である。
- ② 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流またはある文化圏内での価値観の交流を示すものである。
- ③ (略)
- ④ 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合

体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。

- ⑤ あるひとつの文化（または複数の文化）を特徴づけるような伝統的居住形態もしくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。または、人類と環境のふれあいを代表する顕著な見本である（特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの）。
- ⑥ 顕著な普遍的価値を有する出来事(行事)、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。
- ⑦ ひととき優れた自然現象、または、類まれな自然美・美的価値を有する地域を包含する。
- ⑧ ～ ⑩ （略）

現実のアトスとこれらの基準との照合は興味深い。というよりは、基準のことばの端々が記憶のイメージを喚起する。⑤の「伝統的居住形態もしくは陸上・海上の土地利用形態」などは満室で宿泊を断られた断崖絶壁上のシモノスペトラ修道院を思い起こさせるし、⑥の「信仰」の2文字は、当然のこと観光地ではない、アトス本来の意義へと立ち返らせる。また、⑦の「自然」もまた、その美ではなく脅威をもって迫るのではあるが、世界遺産認定時にアトスとその景観が一般的に知られることはなかったと思われる。世界遺産云々は別として、アトスの名が日本で広く知られるようになったのは、やはり、NHKのテレビカメラが入山してからであろう。ラジオ・テレビ放送関係は、2000年前データは「アトス記」でも「資料Ⅱ」として触れたのだが、2000年以後に関しては、今回のこれが初めてであり、文字通りの「拾遺」乃至「補遺」である。

【アトス関係ラジオ・テレビ放送資料】（各項目末尾カッコ内は、保存状態）
◇川又一英（ラジオ講演）「聖山アトスの修道士たち」1989年7月5日／7月12日再 NHKラジオ第2（30分、カセットテープ）

- ◇川又一英（テレビ講演）「こころの時代～宗教と人生／アトスからの手紙」
1999年2月13日再 NHK教育テレビ（60分，VHS）聞き手：金光寿郎
- ◇NHKハイビジョン・スペシャル「ギリシア正教秘められた聖地アトス」
2002年11月22日（120分，DVD）／2003年3月8日再
- ◇NHKスペシャル「ギリシア正教秘められた聖地アトス」2003年2月8日（50分，VHS）（2002年12月8日，2003年1月11日再）語り：長谷川勝彦，資料提供：川又一英，高橋榮一
- ◇ETVエイト「ビザンチンの至宝～ギリシア正教の聖地アトス～」2003年3月13日（45分，VHS）
語り：黒田あゆみ，講義：高橋榮一（早稲田大学名誉教授）

デジタル化したテレビの録画映像は、予想以上にクリアであり、対するアナログVHS映像の劣化状態が目立つようだ。その自然と修道院のたたずまいは、やはり、厳しさが際立つように感じられるが、視聴する側の年齢的な衰えの故もあるかも知れない。しかし、なお、集住修道院での修行はともかく、電気やガスは勿論、水道もない環境での独居やそれに準じる庵室などでの修行は自分との闘いと言うよりも前に、自然との戦いであろう。

それはともかく、川又一英氏の何時に変わらぬ（？）控え目で誠実な語り口が印象的であった。若き日にインド方面放浪中に知り合ったフランス青年からアトスの話しを聞き初めて訪れたアトス、その時は決定的とも言えるインパクトを受けず、帰国後ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』読み返すことがアトス再訪の契機となり、さらに「深入り」していくこととなって、訪問は10回近くとなった。しかし、その語りはあくまでも控えめであり、話しはむしろアトスで知り合った修道士たちの内面へと向かうかに思われる。つまりご本人自身のことは、洗礼を受けられた事実を何気なく語られるが、受洗に至る経緯とかご自分の信仰とかについて、語りの時間を割くことはないかに見受けられる。

高橋榮一教授は中世美術が専門で、『世界の聖域13 聖山アトス』（講談社、1981年3月刊）の解説も書かれているが、上記2003年3月ETVエイトの放送で、アトス最古のプロタトン聖堂のイコン画家をマヌエル・パンセリノスと推定する、極めて説得力に富む講義を展開されている。素人ながら「さもありなん」と興味津津で録画を何度か視聴していた。ある時（そう昔のことではなく、最近）、何かヒラメキを感じた。「ここには行ったことがある。パンセリノスという名は知らなかったが、このイコンは見たことがある」と。自らの「アトス記」で確認すると、「資料I」アトス入山2日目冒頭に、「アトス最古のプロタトン聖堂拝観」とあった。残念ながら、歳嵩が増せば記憶は減退する（?）。

高橋榮一教授と言えば、もう一つこれも「補遺乃拾遺」であるが、小学館版《世界美術大全集》全28巻・別巻1の第6巻「ビザンティン美術」を参考文献として挙げておかなければならなかった。高橋教授が責任編集で、章立て外・本文無しの「カラー図版特集 聖山アトス／メテオラ」が収録されている。巻末に図版説明文がついている。発行は、1997年8月。アトスを含め半年の「海外研修」から帰国翌年、「アトス記」の3年前で、「説明文」にアンダーライン等読んだ形跡もあるにも拘らず、2000年の執筆時には失念していたと思われる。

参考文献、参考資料との出会いと別れというか、それには大袈裟に言えば運命的なものさえも感じられる。一瞬の気迷いがアトアト、当初は思いもしなかった影響を及ぼしたりするものだ。古書などが特にそうで、買うか買わないか、その決断が難しい。妙に気が大きく積極的になったり、逆に妙に消極的に気弱くなったり、懐具合ばかりでなく心身のコンディションも決断を左右する様に感じる。この夏、信州の追分宿の古書店で見かけた、川又一英さんの『聖山アトスービザンチンの誘惑』（新潮選書）もそういった事例と言える。「対抗馬」はドストエフスキー関係2冊。秤にかけて、専門のドストエフスキーを取り、アトスを見送った。川又さんの本を断念したのは、実は

全冊コピーを所持していたからでもあった。そして実際コピーで再読したのだが、再読しつつ入手しそこなったことが悔やまれた。それは川又さんのお仕事に以前にもまして関心が深まって来たからだ。それに、この失策が何か尾を引いているように、「ノート」の進行が停滞気味であったり……

1944年生まれで3歳年長の川又氏が、すでに2004年亡くなっていることは、『ウィキペディア』などで承知していた。また、見かけるたびに購入していた氏の本が、折悪しく転居のあおりで分散していたのを「回収」したりしていた。またネット上の古書販売でかなりまとまって売りに出ているのを見たりした。そして手元にある本を読みはじめてもいたある日、研究室の書棚に何故か「寝ていた」『エチオピアのキリスト教思索の旅』を帰り際に何気なく手に取り持ち帰った。そこで、2005年刊行のこの書籍が遺稿に基づく遺著であることを初めて知った次第。まことに迂闊なことである。さらに巻末には、神谷光信氏の懇切な「原初の祈りに逢着した筆者、最後の「思索の旅」」があり、さらにその後ろに「川又一英（かわまたかずひで）略歴と主な著書」が配されている。便宜のため「主な著書」一覧を抜き書きさせていただきます、筆者の所蔵状況を提示したい。（○が所蔵、△は行方不明）

【川又一英 主な著書】

『ゴッホ』文研出版 1977年

『さすらいびとの唄—インドの大地と放浪者たち』音楽之友社 1979年

△『われら生涯の決意—大主教ニコライと山下りん』新潮社 1981年

のち、△『ニコライの塔—大主教ニコライと聖像画家山下りん』中公文庫 1992年

『ヒゲのウキスキー誕生す』新潮社 1982年

のち、同名で新潮文庫 1985年

○『大正十五年の聖バレンタイン』PHP研究所 1984年

『バックス気分で地球放浪』新潮社 1987年

○『聖山アトス—ビザンチンの誘惑』新潮選書 1989年（ただし、所蔵は

コピー)

『巡礼高野山』(共著)新潮社とんぼの本 1990年

『ビザンティン歴史美術紀行』音楽之友社 1990年

『甦えるイコン—ロシアを映し出す鏡』五柳書院 1995年

○『イヴァン雷帝—ロシアという謎』新潮選書 1999年

○『エーゲ海の修道士—聖山アトスに生きる』集英社 2002年

○『ビザンティン・ロシア思索の旅』山川出版社 2002年

『麻布中学と江原素六』新潮選書 2003年

○『イコンの道—ビザンティンからロシアへ』東京書籍 2004年

○『エチオピアのキリスト教思索の旅』山川出版社 2005年

とりわけ著書目録末尾の作品には感心した。それはもう直接にはアトスに関わらない。しかし、また連綿とアトスから旅は続いている。エチオピアには旧約、モーセの十戒を収納した聖櫃(アーク=タボット)招来伝説があり、年に一度、1月19日、ティムカットの祭りにそれが姿を表す。その機会をとらえるべく、川又さんは北方の町アクスムを目指す。アクスムでの聖櫃参拝をクライマックスとして、エチオピア諸教会等を巡る旅と思索が一種物語的に巧みに配置・構成されている。読者は著者と共に聖櫃巡行を目撃するようだ。ここには、単なる紀行とも虚構とも違う、「思索の旅」と言う新しいジャンルが開拓されているかのようなのである。そういった意味も含めて、ここはすでに「拾遺」の枠を超えて別に論ずべきところであり、それには文献補充も必要である。今はこの場を借りて川又一英氏に哀悼の意を捧げるに止める。

書籍、とりわけ洋書は発注と入荷に隔たりが大きい場合も多く、入荷時点で発注したことを忘れ「こんな本何故に注文したのだったか」と。入荷して積み上げているうちに購入したことを忘れ、最悪の場合は再度購入することになって、「それほどに必要な本であったのだ」とか。川又さんの本に関してある程度目途がたった頃であったか、研究室のテーブルの書籍の山の下の

方から何となく気になる装丁が覗いていた。なんと、亡命ロシア作家ボリス・ザイツェフ（1881年～1972年、22年亡命、24年からパリ）の『アトスへ』という珍しい本（！？）であった。アトスへの興味から発注したのであったろうが、すっかり忘れていた。かろうじて気がついて幸いであったと言うべきか。見返しの内容紹介をノートしておこう。

Зайцев Б.

На Афон. – М. : Издательство «Индрик», 2013. – 416с. : ил.
ISBN978-5-91674-230-5

本書には、ボリス・コンスタンチノヴィチ・ザイツェフによって書かれた、彼の1927年4月～6月、ギリシア共和国と聖山アトス滞在に関わるほとんどすべてが集められた。《アトス》紀行は、三つの著者稿をすべて考慮して本文とし、また初めて2冊の日記帳と沢山のスケッチが公刊される。1928年と1930年にアトスを訪れたスイス人フレデリック・ブアッソンが撮影した写真は、ザイツェフがやって来た当時の、聖なる山の人跡まれな世界を垣間見させてくれる。付録として、新聞『正教ロシア』の戦前の号から、ロシア在外教会の著名な活動家の寄稿を収録した。

裏表紙にも、ザイツェフの親類縁者の写真初出等の記述はあるものの、ほぼ同趣旨のレジュメが印刷されている。それは良しとして、ウツカリ見過ごすところだったが、タイトルページの СЕРИЯ / РУССКИЙ / АФОН (シリーズ / ロシアの / アトス) の3語であった。説明書きはそのページ裏に、《ロシアのアトス》シリーズは、アトスと聖なるアトス山におけるロシアの人々について、ロシアの作家たち、巡礼者たち、学者たちによって書かれた最良の書を刊行する。とあり、ザイツェフの巻は、「第9冊」となると、すでに8巻が刊行されていたことをうかつにも見逃していたと知らされてしまうのであった。反省の意味も込めて、インターネットで検索したシリーズ既

刊本の概要を示す。【配列は、「ザイツェフ」詳細トップ版に従う】

第?冊 Феннелл Н., Троицкий П., Талалай М Ильинский скит на Афоне (エヌ・フェンネル, ペー・トロイツキー, エム・タラライ:アトスのイリヤ僧院) 2011年

初めて、1757年パイシー・ベリチコフスキー長老によって基礎を築かれたアトスのイリヤ僧院の記録の全てが提起される。修道院は、多くの聖なる山への入山者—ロシア帝国即ち大ロシア、小ロシア、コサック、モルダヴィアそしてウクラナ出身者の苦行の場となり、祖国の教会文化記念碑となった。著者たちの研究は、外国のものを含む広範な書籍群と古文書庫の貴重な資料や著者たちの個人的経験に基礎を置いている。初めて、修道院とロシア当局の古文書庫から一群の資料と一連の貴重な図版が公刊される。

第?冊 Рак П. Приближения к Афону (ペー・ラーク:アトスへの接近) 2010年

パーヴェル・ラークは、セルビア・スロベニアの作家で、反政府学生運動の参加者として、1976年ユーゴスラビアを去らねばならなかった。同年、アトスに立ち寄ったのだが、その時彼は根っからの不信心者であった。アトスは深い感動を与えて彼を変え、新たな道筋を指し示した。パーヴェルはそれ以来何度か聖なる山を訪れている。そこで彼は極めて長時間を過ごし、教会では見習い修道僧であった。歴史資料を検討したり、巡礼旅行をしたりしてもアトスを理解することも知ることも出来ない。そこに立ち寄ることは、地球上のある一点を訪れることを意味するのではない。アトスの豊かさを理解するためには、その生活に入り込み、全霊をもってそこに根を下ろさねばならない。それ故本書は『アトスへの接近』と名付けられているのであり、聖なる山で著者の身に起こった具体的出来事についての記述ばかりではなく、人間のアトスへの接近の歴史とその到達の歴史を多く含んでいるのである。

第?冊 Маевский В. А. Афон и его судьба (ヴェー・アー・マエフスキー:アトスとその運命) 2009年

ロシアの亡命作家ヴラジスラフ（ヴラジミール）・アリピノヴィチ・マエフスキー（1893-1975）の著書『アトスとその運命』は、ロシアでは一度も刊行されなかった。著者生前に出版された最後の書籍の一冊であって、20世紀50～60年代ギリシア政府による聖山の事実上の行政管理封鎖という事態の下でロシアのアトス保存の長年にわたる努力の独自の総決算となっている。著者の構想によって本書には既刊の初期短篇集『アトス物語』が再録されているが、それは、ザイツェフの紀行とともに20世紀アトスに関するロシア文学の貴重な資源となっている。

第1集 Троицкий П. История русских обитателей Афона в XI-XX веках (パー・トロイツキー：19-20世紀アトスのロシア修道院の歴史) 2009年

過ぐる世紀の悲劇的な事件によって、19-20世紀の境でのアトスにおけるロシアの修道院生活については我々同時代のものにとって全く知られることが無くなってしまった。本書には、アトスにおける最も大きな修道院—聖アンドレーエフスキー僧院や最も著名ないくつかの僧房に関する詳細な歴史証言が集められている。20世紀初頭のロシア—ギリシア関係には最大の注意が払われている。個別の章では、ユニークなアトスの修道生活の組織化である《ロシア僧房兄弟団》について論じられている。

第?冊 Герд Л.А. Русский Афон 1878-1914 гг. Очерки церковно-политической истории (エル・アー・ゲルト：ロシアのアトス 1878年—1914年 教会政治史概説) 2010年

19世紀末から20世紀初頭、聖山アトスにおけるロシア修道院の生活、その最盛期の歴史について、教会政治の側面を研究したものである。著者は、内外の保管所の古文書資料を基にロシアのアトスの知られざる一面を再現している。

第?集 Шкаровский М. В. Русские обители и Элладская Церковь в XX веке (エム・ヴェー・シカロフスキー：アトスのロシア修道院と20世紀ギリシア教会) 2010年

著名な教会史家ミハイル・ヴィタリエヴィチ・シカロフスキーの著書は、

20世紀とりわけ1910-40年代のアトスにおけるロシア系修道院の歴史を論じている。この年代は、極めて重要であるのにロシアのアトスの歴史にとって研究が手薄な時期であって、この時期ロシア系の修道院においては、物質的に窮乏し修道僧の数が日に日に減少していたにも拘わらず、積極的な精神生活が営まれ、数多くの敬虔な苦行僧や教会活動家が暮らしていたのである。1917-1940年代のギリシア正教会の歴史についての研究も含まれる。それ無しでは、この時期聖山が置かれている状況を理解することが困難であるから。

第7冊 Дмитрийевский А. А. Русские на Афоне. Очерк жизни и деятельности игумена священноархимандрита Макария (Сушкина) (アー・アー・ドミトリエフスキー：アトスにおけるロシア人たち。僧院長・掌院マカーリー（スーシキン）の生涯と業績概説）2010年

大事にはその設立者たち、礎石を置いた人々がいる。正教世界でアトスにおけるロシアのパンテレイモン修道院のことを聞いたことがない人はいないだろう。神意は僧マカーリーをそこにつれて来た。重病の時、彼は剃髪し苦行僧になっていたのだが、健康を回復して永く聖なる山に留まった。僧院の懺悔聴聞僧イエロニムスは、全快の後マカーリーは将来ロシア修道院の僧院長になるだろうと見込んでいた。そのようになった。まさに僧マカーリーの指導の下に僧院はその時代の意義と体制を獲得した。そのお蔭で彼は長年月、アトス日常の内紛、つまり党派闘争や国家的反目を免れることができた。その結果パンテレイモン修道院は主要ロシア修道院の一つとなった。一面から言うならば、顕著な出版事業、多数の修道院僧団、美しい教会、別の面から見れば、絶えること無い祈り、世界周知の荘厳な礼拝である。そして結局修道院生活の主要な成果は、聖なる苦行僧と神のしもべである。彼らは、その日々を終え魂において彼らに近しいロシア修道院の納骨室に終の魂の平安を見出したのである。

第2冊 Талалай М. Русский Афон. Путеводитель в исторических очерках (エム・タラライ：ロシアのアトス。歴史展望旅行案内書）2009年

本書は聖なるアトス山に関するとても便利で図版も豊富な物語旅行案内書

である。とりわけ、長年にわたる聖山訪問者にしてペテルブルクの歴史家ミハイル・タラライによって当地の修道生活については書かれているし、聖山の昔話、伝説や言い伝え、古文書情報、交通案内、聖山関係文献目録、さらに巡礼者への実際的助言もある。

第?冊 ПУТЕШЕСТВИЕ ИЕРОМОНАХА АНИКИТЫ ПО СВЯТЫМ ВОСТОКА В 1834 – 1836 ГОДАХ (1834 – 1836年修道司祭アニキータの東方聖地の旅) 2009年

修道司祭アニキータ、俗名セルゲイ・アレクサンドロヴィチ・シリンスキー=シフマートフは、ロシアのアトス史における著名な人物。聖山訪問はほんのわずかなのだが何故か彼は何気なく自然に、以前はばらばらだったロシアの修道僧たちをまとめて、それまではギリシア人だけが住んでいたロシアのパンテンレイモン修道院へ彼らを連れて行き、ロシアの聖者ミトローファン・ヴォロネシスキーの名によって、最初はパンテレイモン修道院内に、後に預言者イリヤの修道院内に教会の基礎を築いた。かくしてそれ以来、聖ミトローファンはアトスの人々の天上の守護者となったのである。彼がアトスに来たことから聖山における修道生活の復興が始まったと言えるだろう。

こうしてモスクワの《ИНДРИК》出版社のHPから《ロシアのアトス》シリーズの既刊目録を翻訳・ノートしつつ不思議なのは、どう数えても第9冊「ザイツェフ」以前にすでに9冊を数えていることである。第1冊、第2冊までは判るが、第3冊～第9冊は不明、さらに第9冊は「ダブル/カブル」か? 確認のために、既刊分発注の必要があるだろう。

さらにこれも「ドジ」の内だが、既刊分リストの最後に2冊ばかり関連図書の図版が掲載されている。その2冊目の表紙図版を眺めていて、何か記憶の隅に引っかかるものを感じた。それは研究室書架、画集等大型本を積んである所から姿をみせた。

Вздорнов Г. И.

Монастыри и Скиты Святой Горы Афон в фотографиях из
альбома великого князя

Констатина Константиновича. 1867-1872.

Издание 3-е, исправленное и дополненное. – М., Индрик, 2011 –
160 с., ил.

ISBN 978-5-91674-116-2

(ゲー・イー・ヴズドルフ編著：1867年～1872年，コンスタンチン・
コンスタンチノヴィチ大公のアルバムからの写真による聖なる山アトス
の修道院と別院／増補改訂第3版，モスクワ，インドリク社，2011年。
160ページ，図版付)

モノクロというより懐かしいセピア色，ヒランダル修道院の糸杉の聳える
中庭の美しい写真を表紙にした書籍が蘇った。あやうく，〈ロシアのアト
ス〉シリーズ注文のついでにリクエストするところであった。

加えて思わぬ拾い物は，〈ロシアのアトス〉シリーズ目録，後から3番目，
ドミトリエフスキーの著書の紹介文である。僧院長マカーリーによってロシ
ア系のパンテレイモン修道院がアトスで枢要の地位を占め，その達成の一例
として下線部「世界周知の荘厳な礼拝」が紹介されている。原文は，
известная всему миру благолепная служба であるのだが，これもまた記
憶の底をくすぐるモノがあった。2000年拙文「アトス記」資料 I 記録に「(1996
年9月8日，パンテレイモン修道院宿泊の翌日) 朝方雨，荘厳なる夜明けの
祈りの儀式」と自ら記していたのであった。これが「世界周知の」こととは
知らず，しかし，日没の「死」から日の出の「再生」への劇的な祈りの儀式
に痛く感動しつつ，高所に吊られたシャンデリアの蠟燭があの特徴の「灯消
し竿」で一本また一本と消されていくのを眺めていたものだ。

拙文「アトス記」のこれに続く箇所を，ついでに引用させてもらいたい。
パンテレイモン修道院を後にして，次なる目当てシモノスペトラ修道院に向
かう道筋である。

〈抜けるような青空の下、限りなく青い海を眺めて歩きながら……考えた〉『悪霊』スタヴローギンの「多島海」、フェオファン・グレーク〜アンドレイ・ルブリョーフの「青」

ここまで書いて来てようやく（無理やり）納得する。一読者たる私を通して、私と共に虚構のスタヴローギンは現実のアトスにいたのだったと。この読者は、スタヴローギンがかつて実際にこの聖地を訪れ、終夜聖体儀礼にも列したことはすっかり失念していたのだったが。

『悪霊』のスタヴローギンは、ペテルブルクでの放蕩三昧後帰郷し、奇行（町の有力者ガガーノフ氏の鼻を引き回す、前県知事の耳に嘔み付く）を繰り返し、発狂の噂が立つ中、国外逃避の旅に出る。

〈我らがプリンスは、3年あまり旅に出ていたので、町では彼のことをほとんど忘れてしまった。我々はステパン氏を通して知ったのだが、彼はヨーロッパ中を巡歴し、エジプトまで出掛け、イエルサレムにも立ち寄り、その後何処かで何かのアイスランドの学術探検隊にもぐり込んで実際にアイスランドに行ったとのことであった。また同様に、一冬あるドイツの大学で聴講したということも伝えられた。彼は、母親宛にめったに手紙を書かなかった。半年に一度かもっとまれにしか書かなかった。〉

「アトス」訪問については、噂には含まれていない。「アトス」について言及されるのは、所謂「スタヴローギンの告白」（チーホンの下で）の一章に登場する「国外で印刷された文書」においてであり、ここで噂が裏付けられる。つまり、この当初第2部第9章に位置付けられていた1章は、当然ながら作品全体と密接な関係をもっていた。それにも拘らず、諸般の事情により、この1章は完成作『悪霊』から割愛・除外された。残されたのは著者自身の改稿の努力を示す書き込み多数の校正刷15葉とそれらを基に清書したと思われる作者の妻アンナ夫人の筆写ノートである。前者はモスクワの国立文学芸術古文書館、後者はペテルブルクのロシア文学研究所古文書館所蔵である。

前者の校正刷15葉、1996年春現物閲覧可であったが、2010年秋現物閲覧不可、マイクロフィルム閲覧のみになっていた。後者は作家自身の手になるものではないという理由だろうが、2011年春の時点でも現物閲覧可であった。両者ともに著者生前、未亡人生前は「お蔵入り」。日の目を見たのは未亡人も没後の1921年であった。最初の公刊は翌年、モスクワ及びミュンヘン。

該当箇所、校正刷10枚目と筆写本48ページ、言うまでもなくともに革命前の旧正書法であるが、テキストに異同はなく、また校正刷への著者書き込みも珍しくこの部分に関しては見られない。

◀ (…) その後、私は国外に旅立ち4年間を過ごした。

私は東方世界を訪れ、アトスでは8時間に及ぶ終夜晩禱式に立ち通した。エジプトにも行った。スイスで暮らしアイスランドにまでも行き、ゲッチンゲンでは通年クラスで聴講し通した。>

下線部分、原文（ただし、現行正書法に写す）на фоне выстаивал восьмичасовые всенощные をアトスでと言うよりは「アトス記」を執筆するとき失念してしまったという次第。補遺或いは拾遺と称しつつ、リュドミラ・サラスキナ氏の「アイスランドのスタヴローギン」に倣って「アトスのスタヴローギン」執筆を意図しなかったが、或いは「ハリー王子に擬えられる」スタヴローギンの西欧及び東方巡歴をイギリス貴族の「グランド・ツアー」と捉える論考を考えないではなかったが、いずれにしても材料不足の逆の状況が生じているようで他日を期したい。

（サラスキナ氏の論考は、亀山郁夫、リュドミラ・サラスキナ著『ドストエフスキー『悪霊』の衝撃』光文社新書579、2012年4月刊に（郡伸哉訳）で所収）

【2013年12月22日】